

# ゲーテとフランス革命

『フランス出征記』を中心として

大畑末吉

## 目次

まえがき

一 ゲーテはフランス革命をいかに豫感したか。

頸飾り事件

ドイツの現狀

ワイマルのゲーテ

イタリアの旅

二 ゲーテはフランス革命をいかに體驗したか。

革命の勃發

民衆蔑視

フランス出征の直前

ゲーテとフランス革命

歴史の潮

ブラウンシュヴァイク公

運命の日

ヴァルミー會戰の意義

亡命貴族・ゲーテの孤獨感

むすび

註

まえがき

一八二四年二月二十五日、當時七十四歳のゲーテはエッカーマンに、一生をかえりみて次のように言っている。

「私はこういう時代に生れて非常にとくをした。大きな世界的事件が日程にのぼり、それが私の長い生涯を通じて連続したのだから。つまり私は七年戦争や、ついでアメリカのイギリスからの獨立や、さらにフランス革命や、最後に全ナポレオン時代と英雄の没落とその後の事件の生きた證人となつた。これによつて私は、これから生れてきてあのような大事件をわかりにくい書物を通じて知らねばならない人々とはまったく異つた結果と見解とに到達したのである。」

ここに語られている七年戦争はゲーテの七歳の時に、アメリカ獨立戦争は二十六歳の時に勃發したが、ゲーテ自身に對する影響からみても、またヨーロッパの歴史にとつても、フランス革命とその後の情勢ほど重大な意義を持つて

いる事件は少いだらう。同じエッカーマンとの對話に（同年二月十五日）

「私は今十八歳でなくて幸福だ。私が十八歳だった時はドイツもまたやつと十八歳だった。そのころはまだ何かしようと思えばできたが、今ではいろいろ信じられないほど要求が多いし、しかもあらゆる道が行きづまつている。」という言葉もある。

ゲーテを中心とするドイツ・クラシックの本質はフランス革命をのぞいては考えられない。しかも、ゲーテがその「生きた證人」となつたというその意味は、單に同時代に生きていたというばかりでなく、革命戦争に従軍して身もつてその渦中にあつて實情を體驗したことを考慮に入れるならば、いつそう深みをますこととならう。

フランス革命のゲーテに對する深い意義は一七九〇年三月のヤコービにあてた手紙の中で「フランス革命はぼくとつても一つの革命であつたことは、君も諒解されるでしょう」という言葉のうちにもうかがうことができよう。

さて私は「ゲーテとフランス革命」というテーマを次の三つの點にわけて考えてみたいと思ふ。

- 一、ゲーテはフランス革命をいかに豫感したか。
- 二、ゲーテはフランス革命をいかに體驗したか。
- 三、ゲーテはフランス革命をいかに理解したか。

この三項目がフランス革命の歴史的進行の三段階に對應していることは明らかである。すなわち(一)はフランス革命の起因となつたアンシャン・レジームに、(二)は革命の勃發とそれに引きつづく革命戦争に、(三)はテルミドールの反動とそれ以後の政治狀勢に對應して、ゲーテがそれぞれにいかに反應し對決したかの問題である。

さらに、これに對應するゲーテ自身の生活の時期を求めるならば、(一)はゲーテのワイマル公國移住以後イタリアの旅から歸國するまでのおよそ十年間にあたる。この小公國においてゲーテが行政面を通じて體驗させられたドミニク小型絶對主義の體制と、隣國フランスにおける事態の推移とがゲーテに何を感じさせさせたかの問題である。つぎに(二)は一七九二年ワイマル公に從つてフランス戰線に從軍し、後年その時の記録をまとめた『フランス出征記』と『マインツ攻圍戰記』とに語られてある時期にあたる。さいごに(三)はナポレオン時代とその没落、さらにその後の長い時期においてゲーテがいかにフランス革命について反省し解釋したかの問題である。

このように、ゲーテとフランス革命との關係は、それを全般的に取扱おうとするならば、十八世紀の半ばから十九世紀の初頭におよぶ社會的歴史的背景の上に立つて考察されねばならないだろう。しかし私はここでは以上三項目のうち第二の「ゲーテはフランス革命をいかに體驗したか」という問題を中心に取上げて、第一、第三の問題は必要に應じて考慮に入れたいと思つてゐる。

言うまでもなく以上の三點は緊密に連關してゐるものであり、それをこのように分割するのはあくまで便宜的なものにすぎない。それにもかかわらず私が特にここで第二の問題を中心に考えてゆこうと言うのは、およそつぎのような理由によるのである。

われわれ人間の常として、火急の事件に直面したり、あるいはその渦中に巻きこまれたりする場合には、よくその人の態度言動にその人の生地きじが思ひのほか正直にあらわれると言われる。

ゲーテは、フランス革命の勃發とその後の経過をドイツ國內にいて傳聞し、そうすることによつてこの事件に對し

て賛否の反應を示した當時の文化人たち、たとえばヘルダー、カント、クロップシュトック、シラー等の人々とは異つて、前述のように革命戦争に従軍して身をもつてその實情を體驗したのである。そして、その貴重な記録である『フランス出征記』と『マインツ攻圍戦記』には、ゲーテの社會觀や政治觀を示す記事がたくさんある。しかも事件の渦中にあつて、ゲーテの慧眼はよく時勢の動きを洞察しているのである。私の考察の資料を主としてこれに仰ぐのは、このような理由によるのである。<sup>(1)</sup>

## 一 ゲーテはフランス革命をいかに豫感したか。

### 頸飾り事件

ゲーテがフランス革命をいかに豫感したか、という問いに對するゲーテ自身の答えは、しばしば言われるように、かの悪評高い頸飾り事件<sup>(2)</sup>である。

この事件の報に接した時の印象を回顧してゲーテは『フランス出征記』の中でつぎのように言つてゐる。

「すでに一七八五年にかの頸飾り事件が私をゴルゴネンの首のようにおどろかした。この未曾有の犯行によつて王室の尊嚴が葬られ、早くも壊滅されたのを私は豫見した。この事件以來引きつづいて起つたあらゆる現象は、遺憾ながら、おそろしい豫感を裏書きするものばかりだつた。私はこのような豫感をいだいてイタリアの旅にのほり、さらに一そうその豫感を深めてふたたび歸つてきた。」(Goethes Sämliche Werke. Jubiläumsausgabe. (Hr. J. A.) Bd. 28, S. 206.)

また『年代記録』の一七八九年すなわちフランス革命勃發の年の項には、さらにくわしい印象が語られている。「すでに一七八五年に頸飾り事件が名状したい印象を私に與えた。この事件にさいして、不道徳な都會、宮廷、國家などの深淵がここに口を開き、その中から最もおそるべきいろいろの結果が幽靈のようにあらわれてくるように私には思われた。そして私は長いあいだそのすがたからまぬがれることができなかった。その際私がいかに尋常でない様子を示したので、最初の報道がわれわれのところへ達した時、たまたま私といつしよに田舎に滞在していた友人たちは、ずつと後になつて、すなわち革命が勃發してしばらくたつてからでも、あのころの私が氣でも狂つたように見えた」と打明けたくらいである。」(J. A. Bd. 30, S. 7.)

この事件の元兇ともいへべき稀代の詐欺師の魔術師カリョストロ (Cagliostro) については、その四年前にすでにラヴァーター (Lavater) 宛の手紙のなかでつぎのような注目すべき感想をのべている。

「カリョストロの祕儀に關しては、ぼくはあらゆる噂に對してきわめて懐疑的です。暗中ひそかに行われる多くのいつわりについては、君はまだ何らの豫感もいだいていられないようですが、ぼくは情報とまではいわないまでも、その痕跡はおよそ見當がついています。ぼくを信じてください。現代の道徳的な政治的な世界は、大都會において普通に見られるように、地下の通路や地下室や暗渠などでうがたれていのです。それらがどのように連絡しているか、また、そこに巣くつている者たちの事情についてはおそらくだれも考えはしないでしよう。ただ、そこでは土地が陥没したの、かしこでは深い裂け目から煙が立ちのぼつたの、また、ここではあやしい聲が聞こえたの、というようなことになると、はじめて、いくぶん事情に通じている者には、はるかに理解しやすくなるのです。」

以上のようなゲーテの豫感が、單に隣國の宮廷に起つたスキャンダルについての傍觀的な公憤に發したものでなければ、とくに取りたてて言うほどのこともないが、これらの具體的な現象、すなわちその言葉の裏には、ゲーテにおいて常にそうであるように、深い普遍的なものがひそんでいるのである。彼が頸飾り事件の單なる報道に接して示した「尋常でない様子」には、彼自身の祖國ドイツの現状と、彼自身の生活の場であるワイマル宮廷の空氣に對する批判と不安感とがかくされているのである。

#### ドイツの現状

當時のドイツが政治的にまた經濟的に分立主義的體制パルティクラニスムの國家であつたことは周知のとおりである。ゲーテは晩年になつても、ドイツが統一されてターレルやグロッシェン貨幣が全ドイツ領内で同じ價値で通用し、彼の旅行かばんがドイツ國內の三十六ヶ所の税關で開かれることがなく、ワイマル市民の旅券だけでドイツ全國を自由に歩きまわることができるようになりたいものだトエッカーマンにもらしている。(一八二八年十月十七日)

三十年戦争以來ドイツの宿命となつたこの「ミゼーレ」とのたたかいが、ある意味で啓蒙主義でありシュトルム・ウント・ドラングである。このたたかいの戦士となつたのは、十八世紀の中ごろから徐々に恢復を見せ發達してきたドイツの生産力を基礎とするブルジョアジーであり、その當面の敵はほかならぬ封建的諸侯であるはずだつた。ところが、ドイツのブルジョアジーは前述の經濟的政治的分立主義にさまたげられて結合統一された力を發揮することができず、かえつて彼らの生活は諸侯の宮廷に依存するようになつた。

ドイツの知識階級が先進國の國民的統一を見るにつけて、ドイツの現状をかえりみる時、ある者は怒りをもつて（シラー）、あるものは嘲笑をもつて（シュバルト）、あるものは深い憂愁をもつて（ゲーテ）、自分の心境を吐露するのだつた。ゲーテは『文學上のサン・キュロット主義』（*Literarischer Sansculottismus*, 1795）という小論文で、ドイツの文筆家のおかれている不利な環境をばげしい口調でのべ、詩人の能力を最高度に發達させるべき精神的中心點も、共通の教育も、民族的文化も、國家や社會の理解と援助もない、となげいている。（J. A. Bd. 36, S. 139.）

ドイツ最大の詩人のこの悲しい訴えは、若い時代にはプロメーティスの口をかりて、無爲無能の神（封建君主）に對するはげしい怒りとなつて爆發したのであつた。

『プロメーティス』の詩が作られて數年後の一七八二年（この年にゲーテは貴族に列せられた）に『神性』<sup>(3)</sup>（*Das Göttliche*）という詩が作られたが、この中で「未知なる、より高き存在」に似て、その原型たるべき人間の無限の發展の可能性と人間理性の至上權とがうたわれている。

ただ人間のみが

不可能なことをなす。

人間は區別し

えらび、さばく。

人間は刹那に



永遠をあたえる。

この人間宣言はプロメーテイスのように單なる反抗に終始することなく、抑制された形で表現されてはいるが、まぎれもなく啓蒙思想から生れ、ゲーテの一生をつらぬいて、『ファウスト』につながる根本思想であり、その理念においては實にフランス革命の理念と等しいものである。しかし、ドイツの分立主義的現實に面しては、普遍的人間は理想としての自由の世界において實現されざるをえなかつた。それゆえ、ドイツにおいては分立主義と世界主義とは、けつきよくドイツ的ミゼーレの両面である。

このようにしてゲーテのみならず、ドイツの詩人や思想家は絶対主義の世界で、その壓制の下に、また外國からのゆがめられた情報にもかかわらず、先進國の動きに驚異と期待の目を向けていたのである。

それゆえ、ひとたびフランスから球戯場の誓い（一七八九年六月二十日）の報がもたらされると、ドイツの詩人や思想家は歡喜と羨望とのまじつた目なざしを、フランスにおける第三身分（ブルジョアジー）による政治的統一國家の成立に向けたのである。このようなよろこびをゲーテは『ヘルマンとドロテア』の中の村長をしてこう語らせている。新しい太陽の最初のかげやきがさしそめた時、

すべての人は共通な人間の權利について

奮い立たせる自由や、とうとい平等について聞かされた時、

だれがいなむ者がありましよう、心の高まりを、

ゲーテとフランス革命

のびのびした胸の清らかな鼓動を。

そのころは人みなが自分を生かす道を思い、

多くの國々をからめていたきずなはとけたようでした。

怠惰と利欲とが手ににぎつていきずなが。

そのさしせまつた日々においてあらゆる國民は

仰ぎ見たことがなかつたでしょうか、あの世界の首都を

すでに久しく世界の首都ではありましたが、

今こそ今まで以上にその光榮ある名にふさわしいその都を。<sup>(5)</sup>

#### ワイマルのゲーテ

一七七五年にワイマルに移住してから一七八六年にイタリアの旅にのぼるまでのおよそ十年間のゲーテの生活について、彼とフランス革命との關係を理解するに必要なことは、ゲーテとワイマル公カール・アウグストとの關係と、ゲーテの行政面における活動とである。

まず、ザクセン・ワイマル公カール・アウグストがゲーテに對して持つ意義は、トーマス・マンの比喩を用いれば、ヨセフに對するファラオの立場であつた。舊約聖書の創世記によれば、エジプトの王ファラオは家來に言つた。「われわれは神の靈をもつこのような人を、ほかに見いだし得ようか。」またファラオはヨセフに言つた。「神がこれをあ

なたに示された。あなたのようにさどく賢い者はない。わたしの民はみなあなたの言葉に従うでしょう。わたしはただ王の位でだけあなたにまざる。」<sup>(6)</sup>

おそらくゲーテは生れてはじめてカール・アウグストの中に、自分の天分を理解してかれる眞の知己を見いだしたのではなかつたらうか。シュトラスブルク時代のヘルダーは彼を導き教える師ではあつたが、彼の本質を理解するには至らなかつた。それどころかシュトルム・ウント・ドラング時代のゲーテは天才の孤獨をはじめて味わされたのだ。今ワイマルにきて、ゲーテは自我と他我との關係、つまり自我と他我との結びつきの上に成立する原初的な社會的單位を體驗した。このことはワイマル時代の持つ、もつとも重要な意義である。この關係をかりに Volksgemeinschaft と名づけるならば、そこにフランス革命に對するゲーテの態度を理解する鍵があることが明らかにならう。そこそこそシュタイン夫人との仲がどうして冷たくなつたのか、また一かいの造花女工クリスチアーネ・ヅルピウスとどうして結ばれたか、を解く鍵が見いだされよう。

カール・アウグスト公はゲーテがワイマルに來る早々、二十七歳の若者を、閣議において議席および發言權をもつ俸給千二百ターレルの樞密參事官 (Geheimer Legationsrat) に任命した。しかし、これは簡單に事がはこんだわけではなかつた。かねがね若い主君——當時カール・アウグストは十九歳だつた——のいだけ改革案に對して不滿を持つていた宮廷人の反對は執拗だつた。中でも大臣フリツチュは辭職をほのめかしてまでも反對の意向を示した。それ對するカール・アウグストの手紙による返事はさきのファラオの言葉を思い出させる。

「ゲーテは誠實で、しかもきわめて感受性に富む善良な心の持主です。わたしのみならず識見ある人々はいずれも

この人物を所有することを、わたしに祝福してくれます。彼の頭腦と天才とは周知のとおりです。」

ついで一七八二年ゲーテ三十三歳の時には、はやくも樞密顧問官に任ぜられ内閣の首席に列し、同じ年の六月四日にはカール・アウグスト公の推薦によつて皇帝から貴族の稱號を賜つた。ちなみにそれ以後のゲーテの正式な名はつぎのとおりである。

Seine Excellenz der Grossherzogliche Wirkliche Geheime Rat und Staatsminister Johann Wolfgang von Goethe.

つぎに、ゲーテの政治的行政的活動は、まことに多方面であり、また徹底的であつた。閣議における國家行政のほかに、いろいろの委員會の仕事もまた超人的なエネルギーを要求した。しかもゲーテはそのいづれにも誠實に、きちようめに獻身的に参畫して、着々と治績をあげた。

さて、カール・アウグストの知遇にこたえたゲーテの政治的活動は、社會史的にはどういふ意味を持つてゐるか。それは當初半封建的な宮廷人の反對をしりぞけてゲーテを起用したカール・アウグストの經綸と一致したものでなければならぬ。少くともそれと矛盾しなかつた限りにおいてゲーテの活動は自由に發揮され、かがやかしい業績をあげる事ができたのである。

カール・アウグストはかつてプロイセン王フリードリヒ二世（大王）から「前途有望なる青年」と評されたが、後者がいわゆる「啓蒙された絶対主義」（Aufgeklärter Absolutismus）を信ずる啓蒙的専制君主と呼ばれているように、前者にもこの名稱が認められて然るべきことのように思われる。

總面積わずかに一九〇〇平方キロ、總人口十萬のワイマル公國を、ドイツ古典主義の中心、ヨーロッパ文化のメッカにまで高めたことは、まさしく啓蒙的絶對主義の美しい開花とも見られよう。

さてしかしながら、ゲートルは啓蒙主義者ではあつたかもしれないが、絶對主義者ではなかつた。私はさきに、「カー・アウグストの經綸と矛盾しなかつた限りにおいて」と言つたが、その時期は早晩來なければならなかつた。

周知のように絶對主義はブルジョアジーと封建貴族階級の勢力の均衡の上に成立するものであるが、プロイセンのようにブルジョアジーが弱體で分裂状態にあるような國では、フランスの啓蒙思想に接すると、急速に文化政策と保護政策とを取り入れて、それによつて上層ブルジョアジーの育成に力をそそいだ。しかし、そのような政策も要するに君主の絶對權力の維持と國力の増進のためであり、教育の改革や科學技術の奨励なども、下からの要望ではなくて上からの改革であつた。これが啓蒙的專制主義の本質である。

典型的な啓蒙的專制君主フリードリヒ二世の姪にあたるアンナ・アマリアとその長子カール・アウグストの政治も本質的にはそのような限界を持つていたと言ふべきである。

ところで、フランクフルトの市民の息子であるゲートルは、さきに述べたように、プロメーティスの自由の戰士として、また、人間性の尊嚴の體現者としてワイマルに來たのである。ワイマル前期十年間において彼が精根をつくして實現しようとした理想は絶對主義の壁に直面するにいたつた。具體的に言うならば、鑛山の開發とか道路の改修とか軍制の改正とか、富國強兵につながる政策については、ゲートルの手腕にまかされたが、農民の賦役および十分の一税の免除とか農地改革とか、絶對主義の竹馬の一方の脚を切り落すような、本質にせまる問題となると、豫算の不認可

といふ形でその實行は阻止されるのであつた。

その際ゲーテの慧眼にうつつたものは、ワイマル宮廷によつて象徴されたドイツの一般社會の後進性と俗物性とである。これは天才ゲーテをもつてしても、どうにもならないものである。それにもかかわらずゲーテは、このような後進性俗物性が歴史の進展のうちに必然的に止揚されねばならないことを確信していた。

ゲーテのイタリアの旅はしばしば逃走フルリクトと呼ばれ、現にゲーテ自身も「詩的創作力を恢復させるためイタリアへの逃走」(エッカーマン一八二九年二月十日)という言葉をつかつており、さらに一七八八年一月ローマからカール・アウグスト公にあてた手紙のなかで「私の旅の主要目的は、ドイツにおりましては私を苦しめ、ついには私を無用の人間たらしめました肉體的倫理的苦惱から、私をいやすことでありますし、ついで眞の藝術へのはげしい渴きをしずめることとであります。」と言つてゐる。なるほどこれらの言葉は、シュタイン夫人との別れをもふくめて、心理的主觀的にはゲーテの言うとおりにちがいないが、しかし創作活動の停滞もしくは抑制は彼のはじめからの覺悟ではなかつたか。彼は歸國後も一切の官職から身を引いたのでは決してない。なるほど旅行前のような劇職ではなかつたが、それでも宮殿の建築とか、劇場の管理とか、そのほか各種の自然科学、文化科學の委員會の世話をしていたのである。

#### イタリアの旅

ゲーテはイタリアの旅から何を得たか、また歸國後何を經驗したか、について彼自身、ある時つぎのように述べてゐる。

「あの形象豊かなイタリアから私は形象のないドイツへ歸つてきた。そして明るい空のかわりに曇つた空が私を迎えた。友人たちは、私をなぐさめて、ふところに迎えてくれるところか、かえつて私を絶望に追いこんだ。はるかかたに遠ざかつた、ほとんど見わけのつかなくなつたものについての私の無上のよろこびと、失われたものをいたむ私の悲しみと嘆きとは、彼らの感情を害したらしく思われた。私はだから同情は得られなかつた。だれひとり私の言葉を理解してくれるものはいなかつた。この苦しい状態の中で、私はどうするすべも知らなかつた。この不足感はいまにも大きく、外部の感覺をそれに慣らしてゆかなければならなかつた。やがて精神は目ざめ、損失をこうむらないように努めた。

すぐる二年前に私はたえ間なく觀察し、蒐集し、考察して私の天分のおのおのを形成しようとしてつとめた。めぐまれたギリシヤ國民が最高の藝術を彼ら自身（自分）の國民のなかで、生み出すためにどういうふうにしたかということ（こと）を私はある程度まで洞察することができた。こうしてしだいに、全體を達觀することができ、偏見のない藝術鑑賞への心がまえができることを期待しうるようになった。さらに私は、自然が生ける形象を、すべての人工的なものの手本として、造り出すために、いかに合法的に働いているかを見てとつた、と信じている。第三に私の關心のままとなつたのは民衆の風習であつた。彼らから學びとつたことは、必然と恣意の、衝動と意志の、運動と抵抗の、出會いから、いかに第三者が生れるかということ、しかも、それは單なる藝術でも自然でもなく、同時にその兩者であり、必然的であると共に偶然、意圖を持つと同時に盲目である。これを要するに私は、人間の社會を理解したのである。」

この文章の前半については後述にゆずる。後半は、イタリアにおけるゲーテの藝術と自然、その綜合としての社

會についての基本的な體驗として重要な意義を持つてゐることが考えられる。ゲートルはさらに進んで、この三様の體驗にもとづいてそれを實證する三つの論文を執筆したことを報告している。

すなわち第一の論文は『自然の單純な模倣、手法、様式』(一七八九年)、第二は『植物變態論』(一七九〇年)、第三は『イタリアの旅』の中にある『ローマの謝肉祭』という挿話である。

この三つの文章は思想的に相互に關連してゐることは言うまでもないが、われわれの當面の問題から見れば第三の挿話がとくに注目を引く。

ここに語られてゐる有名なローマの謝肉祭の情景は、一見放肆な動きを示してゐるようであるが、それにもかかわらずゲートルはそこに一定の人間の型によつて形成された群がリズムミカルに動いてゐることを見てとつてゐる。そして、ローマの謝肉祭が「元來民衆にほから與えられた祭ではなくて、民衆が自分自身に催す祭なのである」ことに、ゲートルは深い意義を見いだしてゐる。(J. A. Bd. 27, S. 195.)

ワイマルの身分制社會で窒息しそうになつたゲートル、貴族に列せられたことを「何とも思つていない」と言つたフランクフルトのバトリーチエ出身のゲートル、にとつて、このローマの謝肉祭は眞の意味で民族の祭典だつた。

ゲートルにとつてローマの謝肉祭では「身分の上下の區別がしばしのあいだ徹廢されたように思われる。だれもかれもが近づきになる。すべてのものが人から何をされても氣輕にとり、相互のあつかましい無遠慮も一般の上氣嫌のために平均されてしまふ。」(J. A. Bd. 27, S. 195.)

ゲートルがイタリアでいつも心を引かれたのは民衆のすがたであつた。一七八六年九月二十九日附のヴェネチアの記



事につぎのような言葉がある。

「とくに私に迫ってくるものは、またしても民衆である。大きな群集であり、必然的な無意の存在である。」ヴェネチアの町全體が「貴重なものばかりである。すなわち綜合された人間の力の偉大な尊敬すべき作品であり、一人の支配者ではなくて、一つの民族の堂々たる記念碑である。」(L. A. Br. 26. 5. 75)

以上はゲーテがカール・アウグストとの關係において體得した人間共同體の一つの實例であつた。そして、それこそゲーテがドイツにおいて空しく求めたところのものであり、上述のこの節の冒頭に引用した文章の前半に言うように歸國後のワイマル公國において依然として見いだせない絶望感のものである。

こうしてワイマルに歸つてきたゲーテの孤獨感をトーマス・マンはつぎのように結論している。

「彼は、文學ずきか、そうでなければ粗野な、ひたいのせまい、固くるしい、陰口のすきな、氣どりやの、世間知らずの、小都會的小國家的な、ちつばけな人々のもとへ歸つて來た。そこから逃げ出した彼とは別人となつて、しつかりし、完全になり、經驗をつみ、落ちついた、距離感に満ちた心の持主となり、爾後根本的には孤獨の人となつて。自分の氣持を打ちあげるとか、傳えるとか、今では非常にむつかしくなつてしまつた。ゲーテは平凡なきまり文句をならべるとか、奇妙なことばづかいをするとか、めんどろな注文を出したりして、彼の眞意のほどがわからないと人人に思われた。古い友だちに對しても、もはや何の關係も見いだされず、彼から發散する冷たさはだれにも感じられないようになつた。」

こうした孤獨感と冷たさがゲーテの本領でないことは言うまでもない。それはイタリアやフランスの社會の明るさ

に對してドイツの社會のあまりにも暗い八方ふさがりの空氣、ともすれば彼の心の底までもかびさせようとする封建的な社會のうつとうしさに對する彼のレジスタンスのあらわれにほかならない。

## 二 ゲーテはフランス革命をいかに體驗したか

### 革命の勃發

フランス革命の勃發はゲーテがイタリアから歸國して一年後のことであつた。この報がドイツに傳えられた時、教養ある市民階級の人々はおおむね歡呼してそれを迎えた。フランス革命のかかげている理想はすべての人々に福音と思われ、その人權宣言は封建的な制度下に抑壓されていた人々に希望と光明とを與えた。クロップシュトックは自由の勝利をたたえる百人の聲がほしいと歌い、ゲオルク・フォルスターは「哲學が人間の胸中に成熟させ、國家において實現したところのものを見るのはすばらしい」とさげび、シュライエルマッハーは「私は革命を愛します」と父親にあてて書き、ケルナーはバスターユ破壊の日を記念日として貴族特許狀を焼きすてたといわれる。<sup>(9)</sup>以上の思想家、文學者たちの一斑の例によつても、當時の人々の熱狂ぶりがうかがわれる。

では、ゲーテはどうだつたか。われわれが今まで見てきたような心境の彼がほかの人々のように、手ばなしで熱狂しえなかつたことは決して不自然ではない。ただ、前に引用した一七九〇年三月三日附のヤコービあての手紙の文章、「フランス革命はぼくにとつても一つの革命であつたことは、君も諒解されるでしょう」によつて、この革命がゲーテにとつても單に熱狂にとどまらず、人類の歴史にとつてもつと深刻な意味を持つ、容易ならざるものであつたこと

がうかがわれる。

こうしてゲーテはフランス革命を熱狂して迎えた人々にも、また悪魔のように毛ぎらいした陣營にも屬さなかつた。さらにまた、手の平をかえすように熱狂から冷淡に變つた人々の仲間でもない。ゲーテの道は複雑である。

### 民衆蔑視

フランス出征前におけるフランス革命についてのゲーテの文學的發言は一七九〇年の『ヴェネチア短唱』ソングラムに見いだされる。

この詩集は同じころ作られた『ローマ悲歌』において、クリスチアーネ・ウルピウスとの幸福な家庭生活から生じたみずみずしいよろこびと、はなやかなローマの思い出とを、古代的形式の中に結び合わせて、美しい官能の調子をもつてうたいあげた、その同じ詩人の作とは思えないほど、するどいシニズムの調子でつらぬかれている。

それはこの詩集の發生が、思いがけなく早くやつてきた二度目のイタリアの旅——もつともヴェネチア旅行にとどまつてしまつたが——が思うようにはかどらなかつたこと、最愛のウルピウスと生れたばかりの長男アウグストを殘して旅に出なければならなかつたこと、さらには當時新たな情熱をもつて打ちこんだ自然科学の研究を中絶しなければならなかつたこと、等のいわば個人的條件の下に求められることは一應うなずくことができるが、ここでは更に一そう深いところにこの詩集の發祥地を求める必要があろう。

それは今までもしばしば述べたように、周囲の俗物性に對するゲーテの憤懣を考慮に入れなければ理解されえな

いものである。ここにもプロトイスIIゲートの解釋のむずかしさがある。

つぎにこの詩集の中からフランス革命に關係あるものを若干えらんでみよう。

五〇

すべての自由の使徒たちは私にはいつもいとわしいものだつた。

だれもが求めていたものは結局は自分勝手のわがままだ。

民衆を解放しようと思うならば、思いきつて民衆に奉仕せよ。

それがどれほど危険かは、知らないならやつてみるがよい。

五一

王たちは善を願ひ、煽動政治屋もそうだと人は言う。

だが彼らは思いちがいでいる。彼らとて、ああ、われらと同じ人間だ。

われらは知つている、大衆には何を求むべきかわからないのだと。

だが、われらすべてが何を求むべきかを知つている者は、それを示せ。

五三

フランスの悲しい運命を地位高き人は思いはかれよ。

だが地位低き人こそ、げになおさらに思いはかるべきだ。

地位高き者がほろびた。だが、民衆を民衆から

守つたのはだれか。民衆が民衆の暴君となつたではないか。

## 五五

「われわれのすることは正しくはないかね。賤民はだますよりほかに手はない。

見よ、なんてぶざまな。見よ、なんて野蠻なふるまいよ。」

だまされる連中はみな、ぶざままで野蠻かも知れない。

だが誠意を持ちたまえ、そうすれば彼らも人間らしくなつてゆく。

## 五六

君主は銀めつきした銅貨の上にはしばしば自分の

堂々たる姿をきざみ、民衆は長いあいだ知らぬが佛。

狂信の徒はいつわりとたわごとの上に、精神の刻印をおすが

試金石のないものは、それでも黄金だと思つている。

五七

フランスの街頭や廣場で聲高くさけぶ人々を

君たちは氣ちがいだという。私にもそう見える。

だが、自由の空氣をすつている氣ちがいは賢人のことばをはく。

ああ、しかし、奴隸の世界では知恵も黙するほかはない。

五八

長い間おえら方はフランス語を話してきた。

流暢にしゃべれない者は輕蔑されたものだ。

猫もしやくしも今では夢中でその片ことをしゃべつてゐる。

おこりたもうな、おえら方よ、おん身らの望みどおりになつたのだ。

これらの詩で、はき出すように表現されているゲーテの民衆蔑視の感情は相當なものである。これのみを取り上げてゲーテに反民主的な貴族主義者のレッテルをはることは容易であろう。しかし、彼の貴族性がワイマル公國の大臣という地位や、ドイツ皇帝から認許された貴族の稱號などの、いわばけちくさい動機に由來したものでないことは、

貴族の稱號がさすけられた時の（さきに言及した）ゲーテの言葉からも理解されよう。

この民衆蔑視の感情はさらに一そう深く追究してゆく必要がある。トーマス・マンはそれを一種獨特の「生と自然の貴族主義」(Lebens- und Natur-Aristokratismus)と名づけ、それが彼の「自己感情の決定的な要素を形づくつている」と説明している<sup>(10)</sup>。

いずれにせよわれわれはゲーテにおけるこの民衆蔑視の事實を直視しなければならぬ。しかし同時に、この貴族主義が、『ファウスト 第一部』で、ファウストが復活祭の日に農夫たちのおどりさわぐのを見て、それを粗野なものと輕蔑するワグナーに向つて言う、つぎの言葉と少しも矛盾しないことを知らなければならぬ。

わしにはもう村のどよめきが聞えてくる。

ここは民衆の眞の天國だ。

老いも若きも満足してよろこびの盤をあげている。

ここではわしも人間だ、人間としていられるのだ。

(九三七—九四〇行)

ファウストのこのような家長父的・ホメロシク的人間愛の發露こそ『ウェルター』から『ファウスト』に至る「ゲーテ文學」の大きな魅力となつていたのである。

『フランス出征記』の中にも、『ウェルター』にあるような心あたたまる場面が敵味方をとわず、戦塵のあわただし

の中に珠玉のように點綴されている。

ここで私はゲーテの民衆觀ミツルカスについて一應の結論めいたものをまとめておく必要があるように思う。

ゲーテは民主的共同体を形づくつてゐる、あるいはその精神に生きてゐる民衆の味方であつた。そうでないもの、つまり人間共同体から遊離してゐるものには深い懷疑をいだいてゐた。

前述のローマの謝肉祭のローマ市民は、ゲーテにとつて眞の民衆フォルクであつた。『ファウスト』の農民たちがそうである。また後述するように、フランス革命の理想に生きる、あれこれのフランス人がそうである。そして、ゲーテは、せめてワイマル公國においても、そのような民衆を求め、そのような民衆を養成しようとする肝膽をくだいたのである。それは徒勞に終り、彼はドイツ民衆の伴わない孤獨のドイツ詩人となつたのである。

ゲーテのかかる民主的共同体への志向がいかに強いかということ、生來プロテスタントであり、またきわめてプロテスタント的人間であつたゲーテが、『ファウスト 第二部』の終結をカトリック的世界の讚美でかざつたことのうちにもあらわれてゐるのではなからうか。あの場面にゲーテの宗教觀の歸結を求めることはまちがいであらう。あれは純粹に美學的にとくべき場面であらう。<sup>(11)</sup>

ここでも私はトーマス・マンの深い洞察に教えをうけたことを告白せざるをえない。

「しかしゲーテのプロテスタントイスマスは、彼が表象するすべてのことと同じく、また、彼が存在することによつて實現し得たすべてのことと同じく、必ずしも完全に信用しうるものではない。すなわち彼はカトリック的生活の美的な長所というよりは、むしろその民主的共同体形成力の讚美に心をひらいてゐるのである。彼は『人々の生活に



直接に参加するためには、すぐカトリックにならなくてはなるまい。人々のあいだにまじり同列におかれること、市場の生活、民衆のなかの生活、これである。この小さな主権國に住んでいるわれわれは、なんというみじめな孤獨な人間であろう。』と言っている。」

#### フランス出征直前

ゲーテがヴェネチアからワイマルに歸着したのは一七九〇年六月十八日だが、その翌月の七月九日のクネーベルあての手紙によつて、彼が常日ごろ自然科学の研究にいかに関心していたかがよくわかる。

「小生のファウストと植物學研究とをお受けくださったことと存じます。前者をもつて小生は、創作とほとんど同じ程度に苦勞の多い自著の出版の仕事を終えましたし、後者をもつて小生は一つの新しい人生にはいりました。この新しい人生においてもいろいろの苦勞の種はまぬかれないでしょう。小生の心情は以前にもましますます小生を自然科学へかりたてます。<sup>(12)</sup>」

もちろんゲーテの日常生活が自然科学研究で一色にぬりつぶされていたわけではない。また、その研究範囲も植物學に限定されていたのではなく、光學、解剖學の領域に、またその年の終りごろは骨學の研究にまでおよんだ。その間、カール・アウグスト公がシュレージエンで行われたプロイセン軍の機動演習に、プロイセンの連隊長の資格をもつて参加したのに隨行して、三ヶ月あまり家をあけたことがある。そのほかは、ゲーテとしては比較的無事な日々を、最愛のクリスチアーネと三歳になろうとする可愛いざかりの長男アウグストとの平和な家庭生活のうちにすごしてい

たのである。一七九二年四月十八日のアウグスト公あての手紙の中の一文は、そのことを間接に證明している。「光と色の本質の問題は私の思考力をますます占めてまいりました。」

しかし、この平和なゲートルの生活にも歴史の潮はひしひしと押しよせてきたのである。ついに一七九二年八月八日、フランス出征に先發したカール・アウグスト公のあとを追つてワイマルを出發しなければならなくなつた。こうして、今までは何といつても對岸の火災視できた事件の渦中にとびこまなければならなくなつた。

### 歴史の潮

ついにゲートルをして立たしめた、フランス革命を起因とする四圍の國際情勢はどのような動きを示しただろうか。バスターユの城壁に三色旗がひるがえつてからフランスは文字どおり内憂外患の時代をすごした。對外的には革命フランスと封建制ヨーロッパの對立であつた。ルイ十六世は外國のアンシャン・レジュールに訴えて絶對王制の再建をくわだて國內の軋轢をますます促進した。一七九一年六月二十一日の王の逃亡とヴァレンヌ逮捕事件は、ヨーロッパの君主たちをさらに一そう恐怖のどん底におとし入れた。ドイツ皇帝レオポルトはプロイセン王とビルニッツに會してフランスの革命家に警告を發したが、この外國からの干渉は逆効果をきたして、かえつてフランス人の國民感情を強める結果となつた。一方かねてからフランス國外に亡命していた貴族たちはコンデ公を指揮者に仰いで、ラインとモーゼルの合流點のコブレンツに軍隊を集結した。こうして革命の敵がはつきりした形をとつて歴史の上に登場してきた。ビルニッツ宣言によつて刺戟されたフランス國內の共和派はついに、一七九二年四月二十日ルイ十六世に對オ

イストリア宣戦布告に署名させるに至つた。

ところが、フランスの軍隊は、指揮官の不足と、指導理念の分裂による、兵卒と貴族出の將校との間の對立等によつて士氣がふるわず、最初から敗北をきつした。その上、ラファイエット將軍の裏切りがあり、パリでは、彼が軍隊をひきいてパリに進軍しジャコバン派を壊滅するだろうというデマが傳えられ、それに乘じて各派のスパイがみだれとぶという有様であつた。

この時にあたつて、一七九二年七月十一日、かの「祖國の危機」ペトリ・シモン・ジョゼが議會から宣言されたのである。それに應ずるやうに「ラ・マルセイエーズ」を高らかにうたうたう五百人の義勇兵がパリに到着した。その宣言にいう。

「國王の名において今や自由が攻撃をうけている。多くの軍隊がわが國の國境に向つて進攻している。自由をおそれるすべてのものがわれわれの憲法に對して武器をとつて立つた。市民諸君よ！ 祖國は危機にある。」

ビルニツの宣言の逆効果にもかかわらず、同盟軍の司令官ブラウンシュウィク公はフランス國民にあててあの不遜なコブレンツ宣言を發した。

それがどのような内容のものであり、またそれがパリに與えた影響についてはソブールの簡潔な叙述が的確に傳えている。

「コブレンツで起草されたブラウンシュウィクの宣言が、八月一日にパリに傳えられ、愛國的人民を激昂させた。七月末に、首都の雰圍氣はますます昂揚し、街々で祖國の危機が宣言され、入隊式が、おごそかな儀式的雰圍氣のうちに廣場でくりひろげられた。マリー・アントワネットは、革命家たちを恐れさせるつもりで、敵の君主たちに脅迫

的な宣言を要求した。一亡命貴族がそれを起草し、ブラウンシュヴァイク公が署名した。宣言は、國民衛兵、およびあえて侵入者に『抵抗する』逡巡者たちを死をもつて脅かし、またパリの人民を、もし王室に『いささかでも危害』を加えるならば、『パリ全市を軍事的處刑と完全な破壊とにゆだねることにより、見せしめとなり、永久に記念となるような復讐』をおこなうであろうと脅迫した。宣言は、宮廷が予期した結果とは反對の結果を生んだ。それは人民を激昂させた。<sup>(13)</sup>

ブラウンシュヴァイク公の宣言はドイツの識者にも、その表現のあまりにも挑戦的なのに、不安と懷疑とを感じさせた。ゲートルも『フランス出征記』のなかで、彼らしい婉曲な言いまわしでこう言っている。

「他方、八月半ばの悲しむべき事件がパリから伝えられてきた。それによるとブラウンシュヴァイク公の宣言に反して、王は捕えられ、退位させられ、犯罪人として取扱われたということである。しかし、目前の作戦にとつて何が重大であるか、ということが詳細に論議された。」(J. A. Bd. 28, S. 35)

こうして八月十日の革命となり、フランスの王制は事實上廢止の運命となつた。以上がゲートルがフランス戦線におもむいたころのフランス革命の情勢である。

#### ブラウンシュヴァイク公

ゲートルは八月八日に従者ゲッツェ(Götze)をつれてワイマルを出發し、故郷フランクフルト・アム・マインに向つた。ここで彼は久しぶりに母と會つて十日ばかりすごした。その間に八月十七日附のクリスチアーネあての手紙が

書かれた。

「今日あなたのお手紙を受取りました。いとしいひとよ、わたしはあなたが好きで好きでならないこと、そして、今はどこをさがしてもあなたのすがたが見えないことを、もう一度あなたに伝えるために筆をとりました。

母上にお目にかかつて、ご無事でお元氣であることを知りうれしく思いました。友人たちもみな親切に迎えてくれました。當地にはいろいろ見るものが澤山あつて、この數日というものまつたく席のあたたまるひまがありませんでした。わたしが一番心にかけたのはユダヤ人の小間物で、これは明日荷造りして來週お送りします。それが着いたら、あなたはきつと大ききをするでしょう。このようなものをあなたはまだ見ていないにちがいないから。みな大切にしておいてください。こんな寶物はそう毎日見られるものではありませんから。

ではごきげんよう。マイヤーさんよろしく。坊やにキスしてやつてください。お父さんはもうじきに歸ると言つてやつてください。わたしを忘れないように。家の中をきちんと整理して、折々はわたしに手紙を書いてください。」

一見、たいした意味もないようなこの手紙をここに引用したのは、ゲートとクリスチアーネとの關係が當時のワイル宮廷の特權階級的意識を持つた俗物たちがいうように反倫理的なものではなく、かえつて眞の愛情に根ざしたものであること、しかもそのような愛情こそそのような人々には理解されなかつた市民的ヒューマニティにもとづいてゐること、またゲートがいかに夫として父親として家庭という共同體につながつてゐるかということ、さらに、これから戦線におもむこうというのにそのことは露ほどもあらわさず、まるでちよつとした旅行にでも出かけるようなさりとほのんびりすぎると思われるような手紙であること、を示したためである。

事實、ゲートルは九月二日にヴェルダンが陥落した時もクリスチアーネにこう書いてゐる。

「今日、町は降服するでしょう。軍隊はさらにパリに向けて進軍するでしょう。萬事進みかたが早いから、まもなくまたあなたのところへ歸れるでしょう。パリからわたしはあなたのためにおみやげを持つて歸ります。」

このように戰場の中にまで持ちこんだ平和な家庭の雰囲気、彼の出發の決意をいくぶんでも牽制しようことは想像にかたくない。加うるに彼の「思考力を占めている」自然科学の研究を中絶しなければならぬことも、彼には残念であつたにちがいない。

しかし、いやしくも一國の責任ある大臣としてのゲートルが今回の出征に欣然として従軍できなかったのは、單に以上のようないわば私人的理由のみであらうか。彼をして逡巡せしめた、いわば公人的理由は何か。

その一つはカール・アウグスト公のプロイセン・オーストリア同盟軍における地位に關連することである。カール・アウグストは母后アンナ・アマリアがプロイセン王フリードリヒ大王の妹である關係上、大王の甥にあたるフリードリヒ・ウィルヘルム二世（一七四四—一七七年）とも親交あり、一七八五年に結ばれた君主同盟の方針にも共鳴してゐた。

このような事情からカール・アウグストは一七八八年にプロイセンの軍隊にはいつて、陸軍少將にまで昇進し、甲騎兵連隊長になつた。一七九二年のフランス出征の時、ドイツの對フランス宣戰布告がなされていなかつたので、彼はワイマルの軍隊をひきいることなく參加したのである。

ワイマル公の同盟軍參加についてゲートルははじめから反對意見をいだいてゐた。なぜなら、プロイセン軍の動きの

動機が君主同盟の精神にもとづいて、封建的な絶對制を固守して、人權と自由のためにたたかう人民を攻撃するにあつたからである。と同時に、小國ザクセン・ワイマルの困難な財政がゲーテの努力によつてようやく立ちなおりかけた矢先のこととて、そのために國家の基礎があやうくなりはしないかという疑懼があつたからである。

その二はブラウンシュヴァイク公カール・ウィルヘルム・フェルディナントに對するゲーテの批判的評價にもとづくものである。ブラウンシュヴァイク公はワイマル公の伯父にあたる人で、ゲーテにとつては主君と同列にある人だつた。しかし、ワイマル公國の軍事委員會を主宰しているくらいにゲーテが、あの惡評高い「人間販賣」またの名「兵士質<sup>カシッポ</sup>易」の事實を知らないはずはない。しかもブラウンシュヴァイク公はこの恥ずべき犯罪を三回にわたつて犯したといふ。すなわち第一回は一七七六年に四三〇〇名のドイツ青年を、アメリカ植民地の獨立運動彈壓のための防彈具としてイギリスに賣り、第二回は一七八八年にネーデルランドに三〇〇〇名を、第三回は一七九五年に一九〇〇名をふたたびイギリスに賣りわたしたのである。これらの青年が結局はいずれも異境の空のもとに悲惨な最後をとげたことは、かくれもない事實である。<sup>(16)</sup>

ゲーテは、この事實に對して、シラーの<sup>(16)</sup> ようにはげしい怒りを爆發させはしなかつたが、ひそかに公憤を感じてゐたろうことは明らかである。以上のことを考えると、ゲーテがフランス出征中にブラウンシュヴァイク公にたつた一度だけ、それも同盟軍の潰走中に出會つたといふことは、なかなか興味ある特徴的なことと言えよう。その時のゲーテの一見儀禮的なおだやかな言葉にひそんでいる、かくれた氣持を見のがしてはならない。

それは、フランス領のマース河の左岸を退却する同盟軍の「慘愴たる行軍に終始參加している」時だつた。「ブラ

ウンシュワイク公がわれわれの背後を進んでくるということが傳わつた。われわれは行進をとめて、うやうやしく彼を迎えた。」こうして二人は二三言葉をかわした。そして「公爵はわれわれすべてに堅忍持久をのぞんだ。私はそれに對して、われわれおよび正義を救うためには公の健康にかえがたいものはないのだからと言つて彼の健康を切に祈つた。元來、彼は私を決して愛してはいなかつたのだ。そのことは私も認めないわけにはいかなかつた。彼はそれをあらわにあらわしたが、それも私は大目に見ることができた。ところが今や不幸がおだやかな仲裁の女神となつて、われわれを同病相あわれむの仲にしたのである。」(J. A. Bd. 28, S. 96.)

以上のようなもろもろの理由によつてゲーテは、およそ勇躍とは反對の氣持で出かけたのである。それにもかかわらずゲーテがあえて出征した理由の一つは、カール・アウグスト公に對する人間的共感であつた。このことについては、すでに一言しておいたが、ゲーテのカール・アウグストに對する關係は單に君臣主従というような上下のつながりでは決してなかつたことを再認識しなければならない。

これを裏書きするような挿話が『フランス出征記』の「十月二十九日 トリール」の記事の中にのつている。退却中のゲーテのところへフランクフルトの母から手紙がきた。それによるとゲーテの伯父の市參事會員テキストルが死んだのでその後任にどうかと言つてきたのである。ゲーテはこの手紙で、戰塵の中から、まだ占領されてはいないがすでに脅威にさらされている故郷に思いをはせたのである。小さなワイマル公國にくらべたら、はるかに働きがいのある帝國直屬の自由都市からの名譽な申込みを、ゲーテは結局辭退した。その理由として彼が述べるところはつぎのとおりである。



「十二年以來（實際は十七年以來）筆者註）私はたぐいまれな幸福を、すなわちワイマル公の信任と寛容とを享受してきた。この生れながらに最高の天分にめぐまれ、幸福な教養をつまれた君主は、私の誠意ある、しかし、しばしば十分でなかつた勤務に満足され、私に自分を發展せしめる機会を與えられた。このことはわが祖國において他の條件のもとでは決してありえなかつただろう。わが感謝の念は限りない。また、公の母君ならびに公夫人に對し、そのいやさかえる御一家に對し、およばずながら微力をつくした公國に對し、私のいだけ愛着の念は限りない。同時に私は教養の高い新しい友人たちのサークルや、私の常に變らない境遇から生じた他の多くの家庭的な愛と幸福のことも思ひ出さずにはいられない。」（J. A. Bd. 28, S. 128.）

このような手紙の調子から、また『フランス出征記』にしばしば出てくる君侯に對するゲーテのいわば鞠躬如とした態度から、彼の俗物性を引き出すことは簡單だが、前述の貴族性の問題からも理解されるように、そしてさらに、ゲーテにおいては常にそうであるが、その反證をあげることも容易なのである。

このことに關してトーマス・マンはつぎのように言つてゐる。

「ベートーヴェンのいきさつやカールスバートの散歩道における皇族との一件があるにはあつたが、彼が恭順だつたと考えるのは全く途方もない誤りだろう。王侯に對してゲーテが結んだ君臣の關係は、單に個人的な友情が加わらない限りは全く社交的な性質を帯びてゐた。」<sup>(18)</sup>

## 運命の日

さて、ゲーテは八月二十一日午前、フランクフルトをたつて午後マインツに着いた。この日からのゲーテの足どりは『フランス出征記』と『マインツ攻圍戦記』によつて、大體たどることができる。ただ、個々の點において多少事實とちがうところがあるが、それは各種のゲーテ全集の編集者や學者によつて指摘されているからそれを参照する必要がある。

もつとも、この二篇はもと『イタリアの旅』と共に『詩と眞實』の續篇のつもりで書かれたので、最初は「わが生涯より 第二門第五部」という副題がついていたという。したがつてそこには純粹に戦争記録ばかりが叙述されているのではなく、本稿においても今までにしばしば見られるように、戦争とは直接關係のないことまで、時には詳細をきわめて論述されている。<sup>(19)</sup>

であるから私はここでは、當面の問題に直接非常に關係することがらの若干を引き出して考えてみようと思う。

ゲーテは八月二十三日マインツを出發し、ラインに沿うて下り、さらにモーゼルに沿うて上つて、二十五日午前トリールに着いた。さらに二十七日ルクセンブルクを通過していよいよフランス領にはいり、これよりさき二十三日に陥落したロンウイ(Louwy)のプロイセン軍の陣地に追いついた。このころから天候がくずれだした。

ロンウイの意外に早かつた陥落と、例のブラウンシュヴァイク公のコブレンツ宣言とは、同盟軍と亡命貴族軍を大いに氣おい立たせた。しかし、ゲーテは周圍の戦勝の興奮の中で冷靜に事の眞相を見きわめようとしていたらしく、すでにこの日の記事の中で、連合軍の指揮系統の不統一や、連合軍の將校や兵卒によるアッシニヤ紙幣の悪用などを目撃して前途の暗雲を豫感しているかのである。ブラウンシュヴァイク公の宣言については、ゲーテは「革命フラン

スに對する憎惡と侮蔑」とに満ちたものと斷じ、アッシニヤ紙幣については、「おそらくかのブラウンシュワイク公の宣言について、この處置ほど王黨に對して國民を激昂させたことはなかつた」と言つてゐる。(J. A. Bd. 28, S. 15, 18)

九月二日にヴェルダンがはげしい抵抗の後に陥落し、連合軍はさらに前進してヴァルミー (Valmy) 附近に達した。やがて運命の日、九月二十日がやつてきた。その日は明けがたから細雨が降つてゐた。この地のフランス軍はデュムーリエ (Dumouriez) の指揮下にあつた。それにケラーマン (Kellermann) 指揮下のモーゼル部隊が加わつた。彼の砲撃戦は激烈をきわめた。「大地は眞に文字どおりふるえた。しかし、兩軍の位置は少しも變化を見せなかつた。」(J. A. Bd. 28, S. 57)

一番ふしぎに思つたのはプロイセン王だつた。彼はフランス軍が算を亂して敗走するものと期待してゐたのである。ゲートも、砲撃戦のさ中を「勇敢に、いや無鐵砲に」ただひとり馬を最前戦まで驅つたところを見ると、あるいはそんなふうののんきに考へてゐたかも知れない。

いずれにせよゲートはそこではじめて、自分の目でフランス軍の陣地をながめることができた。ケラーマンの指揮してゐるサン・キュロットの兵士たちは半圓形の劇場風の地形に、きわめて落着いて安全に密集してゐた。これはゲート自身にも、ふにおちぬ光景であつた。なぜなら、從來の常識から言えば、戦闘は廣い場所に散開して行われるべきだからである。

こうしてこの運命の日九月二十日は暮れていつた。しかし「フランス軍は少しもその位置をうごかなかつた。ケラ

マンはかえつて一そう有利な地點を占めた。わが軍は砲火の範圍外に退却を命ぜられた。まるで何事もなかつたやうなふうだつた。最大の困惑がわが軍の上にひろがつた。この日の朝には、まだ、フランス軍の全部を突き刺して、たいらげてしまうことよりほかのことは考えていなかつた。私自身でさえ、わが軍とブラウンシュウィク公とに對する絶對の信頼にさそわれて、この危険な遠征に参加する氣になつたのである。ところが今や、だれもが黙々と歩いて、たがいに顔を見合わせるものもない。あるいは顔を見合わせても、それはののしつたり、のろつたりするためだつた。」

こうして、この日の夕べゲートは數名の士官にとりかこまれて、あの有名な「ヴァルミーの豫言」をはいたのである。

「ここから、そして今日から、世界史の新しい時代がはじまる。そして、諸君は、それに參加したと言えるのだ。」  
(J. A. Bd. 28, S. 59.)

この言葉はきわめて比喩的である。この言葉そのものについても、はたしてゲートがこのとおりに言つたかどうか、また、はたしてその時に言つたかどうかについて問題がないわけではない。が、いずれにせよゲートがこの運命の日の重大さを直感したことは事實であろう。少くとも彼は他の將卒のように半ば自棄的にののしつたり、のろつたりはしない。それは歐州第一の精銳を誇つたフリードリヒ大王の軍隊が敗退して、裝備の不完全な人民軍が陣地を固守したのは、決して偶然ではないといふ認識にもとづく冷靜さである。

そして、彼がワイマル出發以來今まで見聞してきたことはすべて——直接に關係のないことまで——この認識の前

提條件となり、この日以後の悲惨をきわめた退却行軍において見聞したことはすべてこの認識の證據かためとなつたのである。フランスの一寒村ヴァルミーの砲撃戦はゲーテの頭のなかで、しだいに世界史的なひろがりと深みをおびてきたのである。

#### ヴァルミー會戰の意義

しかし、われわれはここでもう一度ヴァルミーの戰場に立ちかえつて、このたたかひの意義を考えることにしよう。ソプールはつぎのように理解している。

「ヴァルミーの會戰は戰術的な勝利ではなく、精神的な勝利だつたのである。サン＝キュロットの軍隊はヨーロッパ一の軍隊を前にして譲らなかつた。革命がその力を發揮したのであり、受動的な訓練を施された職業的な軍隊に、國民的で人民的な新しい軍隊が立ち向ひ、勝利をおさめたのである。革命のフランスは容易には打ち負かされないであらうということが連合軍にはつきりした。<sup>(20)</sup>」

この言葉にいささかの疑問もないが、ただ、「精神的な勝利」をもたらした背後には「戰術的な勝利」があるのではないだろうか。ゲーテは戰術家でないから、その記述の中でこの問題に、はつきりふれているとは思われない。ソプールの言う「受動的な訓練」とか「職業的な軍隊」についてももう少し詳しく知るならば、われわれの理解は一そう深められるであらう。そのために私はフランツ・メーリングの『レッシング傳説』の中の説明を借用しようと思う。

「ナポレオンの戰略は、國民軍に基礎をおき、かつ散兵戰術と徵發制度に基礎をおくものである。その前提條件

は、すみやかに前進して散開する集團的軍隊である。すなわち、どのような地形でもたたかいうる散兵戦術であり、人民から直接に食糧を調達してみずから給養できる徴發制度である。それに反して前世紀の軍隊は傭兵隊であり、横隊戦術と糧秣給與の制度に結びつけられていた。その軍隊は募兵に多額の費用がかかるので一定数をこえることができなかった。それは固定した戦列においてのみ、という意味は、士官たちの杖と威嚇的な彈丸とによつて把握される戦列においてのみ敵に立ち向わせることができるのだつた。したがつて、ほとんどひらけた平野でのみ戦闘に使用することができた。いわば一種の機械じかけの射撃兵器のようなものだつた。そして、その集中射撃の速度ということが軍隊教練の主要目的であつた。げんにフリードリヒは、ついにはその速度を一分間に六發射、そして七發射目に裝填、というところまで進めた。最後にその軍隊は陣營から嚴重に監視され、したがつて大元帥によつて統監されねばならなかつた。軍隊のうごきは糧秣庫とパン焼所とに密接に結びついていた。したがつてその活動の自由は非常に制限されたものになつた。もしフリードリヒがナポレオン戦略をまねして彼の傭兵を散開させたならば、即日彼の軍隊は四方に脱走することだろう。いわんや、彼の傭兵に徴發を許さうものなら、少くとも彼の軍隊の一部はただちに盜賊團に變つてしまつたであらう。」

このように國民から遊離した魂のないプロイセン軍に對して、ゲーテの見た革命軍の兵士たちは、いずれも一つの目的を追求し、一つの理想に生きているという自覺をもつていた。ゲーテが『マインツ攻圍戦記』の中で語るところによれば、一七九三年七月二十二日、兩軍のあいだに休戦がむすばれ、數日後には城内の革命軍が撤退することになつた。その時の彼らの徹退ぶりは、フランス戦線における連合軍の悲惨な有様とは非常にちがつていた。革命軍の兵

士たちは「眞剣な、いまいましてな様子ではあつたが、元氣のない、はずかしいというふうは少しもなかつた。」(A. Bd. 28, S. 245.)

フランス出征軍はヴァルミーの會戰を轉機として、豪雨と泥濘のなかをみじめな退却を開始した。當時の手記の一節にこうある。

「天候や道路の障害は、じつさいそこになかつた人には想像もつかないほどだつた。六週間のあいだに、われわれは一生を通じて経験したよりも以上の悲惨と危険とを味わつた。じつさい軍隊の窮境はとて筆舌のつくすところではなかつた。道路も天候もお話にならない。どうして人や車がフランスを脱出することができたかふしぎなくらいだ。この遠征は歴史に、みじめなすがたをいつまでも残すであらう。」

ゲートルはトリールからモーゼル河を舟で下つてコブレンツにつき、デュッセルドルフのヤコービの家に約一ヶ月滞在した。こうしてワイマルに歸着したのは十二月十二日だつた。

以上はゲートルのフランス出征から歸國までの顛末の概略であるが、なお當面の問題を理解する上に重要と思われることで、今まで觸れ得なかつたことをつきに述べてみよう。

### 亡命貴族・孤獨感

その一は亡命貴族の問題である。

亡命貴族がフランス革命の進行をはばむために陰で大きな役割を演じていたことは周知のことである。

彼らはおおむね尊大で、祖國の利益よりも一身の利益を守るのに汲々としていた。その上外國にあつてパリの王黨派と通じ、フランスからの情報をやがめてひたすら革命の非人道性と其の失敗を宣傳した。とくに人々の不安を惡用してアッシニヤを惡用し、ついには質造紙幣を使用して經濟の基礎を攪亂しようとするに至つた。

ゲーテが出征中に見た亡命貴族たちも、やはり程度の差はあれ、そのような者が多かつた。『フランス出征記』の開巻劈頭に出てくるオルレアン公の情人、亡命軍の司令官であるコンデ公のかくれなき愛人モナコ公女等、氣ぐらいの高い美しいフランス女性からはじめて、全篇にわたつて亡命貴族の反民主的、反革命的な行狀が漸層的にたくみに點綴されている。もつとも、中には高潔な人格によつてゲーテの關心を引いた例も二三語られているが。

ゲーテは例によつて、事實を客觀的に描いているだけであるが、彼の本意はそこにアンシャン・レジームの貴族社會の腐敗と革命の必然性とを暗示していることは言うまでもない。

それに反して、ゲーテにとつては敵がわであるはずのフランスの市民や農民に對する彼の好意的なあたたかい目なざしは、まことに特徴的である。戰塵の中に展開される彼らの美しい人情や、あるいは戰爭の暴力にひしがれてゆく悲劇は、『フランス出征記』を優に戰爭文學としても通用せしめるに足るだけの魅力がある。そのような悲劇の一つを語つたあとでゲーテはつぎのように感慨をもらしている。

「私は告白する。これよりも殘酷な光景、これよりも深い男子の苦惱が、そのあらゆる段階を示しながら、私の目の前にあらわれ、また私の心に徹したことはまずなかつた。ひとりギリシャ悲劇のみがこのように單純で深刻に人の心をとらえるものを持つていふと言えよう。」(J. A. Bd. 28, S. 19.)



つぎに、フランス出征中にゲーテが會つた舊友知人の問題がある。この關係もまたゲーテのフランス革命觀を知るに有益な鍵となるう。

ゲーテはフランクフルトからマインツに着くとさつそくゼンメリング一家、フーバー、フォルスター一家等の舊友と、たのしく二晩をすごした。その時のことを『フランス出征記』の中でゲーテはこう言つてゐる。

「學問と見識とを土臺にした、惡意のないじようだんの自由なやりとりは、この上ない明るい氣分をかもし出した。しかし、政治問題については話にのほらかなかつた。たがいに相手の氣持をいたわりあう必要が感じられたのである。

というのは、彼らは共和主義的な思想を必ずしも全然否認してゐるわけではないのに、一方私はといえば、ほかならぬその思想とその影響とに最後のとどめをさすべき使命を持つ軍隊と行を共にするために、公然といそいでいたからである。」(J. A. Bd. 28, S. 4f.)

ここでもゲーテはいつものように、さりげない文章を書いているが、友人によつて理解されない悲しみを證明する證據がある。それはこの會合の直後フーバー(Hüber)がケルナー(Körner)にあてた手紙である。

「以前の彼を知つていた人は彼の人相に、きわだつて官能的な、ゆるんだ表情のあるのを見がしませんでした。

小生は、より高い目標に對する感激がゲーテにあるとはもはや信じません。かえつてある種の賢い感覺的なもの研究に没頭していることが認められます。そのような官能性の理想を彼は主としてイタリアで樹立したらしく、その中に、以前の彼の精神とは反對に、科學的對象およびそのほかのありあわせの對象をいろいろと皮相的に取扱うやり方で、はつてゆくのです。」(J. A. Bd. 28, S. XXIII.)

このバリ生れの進歩主義的な代理公使フーバーのやや見當ちがいの批評は、その場の氣分が『フランス出征記』の中で言われているものと全然同じではなかつたことを示している。ゲートル自身も後になつてそのことを『年代記録』<sup>7</sup>の中ではつきり言つてゐる。

「マインツ、デュッセルドルフ、ミュンスターの各地を訪問した際、私の舊友たちが私を、もはや正しく認めようとしないうちに氣がついた。」(J. A. Bd. 30, S. 15.)

この『年代記録』によつて友人との疎隔が單にマインツの友人たちとの特殊な現象だつたのではなく、ゲートルの生涯を通じていつも經驗しなければならなかつた運命だつたことがわかる。デュッセルドルフのヤコービにあつた時の『フランス出征記』からの記事はつぎのとおりである。

「私はここ數年來あの友人たちと會つていない。彼らは忠實に彼らの人生行路を守つてきた。それに反して私には、試練と實行と忍苦のいくたの段階を通過して行かなければならない、ふしぎな運命が與えられた。そのため私は、人となりにおいては少しも變らないが、まつたく別の人間となつて、古い友人にはほとんど見わけがつかないようになつた。」(J. A. Bd. 28, S. 148.)

ここにわれわれは、シュトルム・ウント・ドラングを共通の出發點とする二人の青年が、一人はそのままロマン的なキリスト教的敬虔主義に沈み、もう一人は「試練と實行と忍苦」の迷路をたどつて人生と社會とを大觀する境地に達したことを知るのである。

しかし、ゲートルには友人にさえ理解されないことから生ずる孤獨感が残された。

「當時の私に見るような、またその後長いあいだの私に見るような、孤獨な人間は想像できない。」という悲痛な言葉も、その際言われたのである。(J. A. Ed. 28, S. 155)

この孤獨感は『フランス出征記』を契機として、今後次第に深められてゆく。それは單に、友人に理解されないと、革命を取扱った作品が世人に迎えられないとかいうばかりではない。むしろ、フランス出征中に見聞したいいろいろの經驗に裏づけされた、ワイマル宮廷におけるゲーテの社會的立場に由来しているのではなからうか。

彼の孤獨感は社會そのものについての感情ではなくて、新しい歴史の歩みにとり残された人々にかこまれているための孤獨感であつた。

## むすび

以上私はゲーテのフランス出征を中心に、ほぼ時間的に順を追つて彼の體驗を述べてきた。この叙述には繁簡よろしきをえないところもあり、また重要なことで不問に附したところも多々あることと思う。しかし元來私の執筆の意圖が「ゲーテ傳」の一節ではなく、「まえがき」に言うように、革命戦争の渦中にあつたゲーテが何を見聞し、いかに反應したか、そしてそれがゲーテのフランス革命觀にどのように影響したか、という問題であるならば、以上述べきつた範囲においても、當時のゲーテの心境を知る若干の鍵は見いだされるであらう。

ゲーテの慧眼はフランス革命という歴史的事件の意義については、その渦中にあつたにもかかわらず、正しく把握

していた。このことは、かのヴァルミーのことがかりつばに證明している。すなわち革命の理念には賛成だったが、その現象に對する態度は拒否的であつた。なぜなら、彼の根本信條である秩序をみだすものだからである。かつて彼は、じょうだん半分ではあつたが「不秩序をがまんするくらいなら、むしろ不正を犯すほうがいい」とまで言つたほどである。また革命は、自然科學研究によつて得た、自然界の法則による漸進的進化の理念にそむき、ワイマルの行政經驗から生れた「上からの革命」の信念に反するものと、ゲーテは考えていたのである。

このように革命に對する二様の態度がフランス出征中のゲーテに、常に一種のあいまいな、憂愁の影を投じているのである。だがこの二様の態度はゲーテ自身にとつては兩方とも眞實なのである。とすれば、この矛盾と憂鬱の根源は、ゲーテの内部をいかに掘りさげても見いだすことはできないだろう。

それはゲーテが生きて呼吸をしているエレメントの持つてゐる矛盾の反映にほかならない。エレメントの反映といつても、それはゲーテの受動性を意味するものではない。他の人々が時代の動きや社會の問題を運命的なものとして受け入れたのに對して、ゲーテはそれらを自分自身の上に矛盾として體驗したのである。このように時代を、社會を、自分の問題として苦惱することによつてそれを解決しようとした。なぜなら矛盾は妥協することによつて眞の解決に達するものではなく、相互の共通の奥底にある普遍的なものによつて止揚アウフヘーベンされるところに眞の解決の道があるからである。

ゲーテにとつてそれは、社會の根源現象クワイセツテグライインである Volksgemeinschaft であつた。ゲーテがフランス革命によせた期待はその實現であり、ひるがえつてドイツに對する幻滅は、どこにもその實現の氣配が感じられなかつたことであ

る。しかし、彼はいたずらに失望はしなかつた。八十三年の長い生涯にわたつて、ドイツ國民の生きる道を追究したゲーテは、個々の段階においては矛盾をふくみつつも、全體として人類の前進の可能性を信じ、それを身をもつて實現したのである。『ウィルヘルム・マイスターの遍歴時代』、『ファウスト 第二部』は人類に生きる希望を與える彼の偉大な遺言書である。

#### 註

(1) 『フランス出征記』、『マインツ攻圍戰記』の二篇は、事件當時から三十年もたつた後に執筆されたものである。したがつてその間のゲーテの回顧と反省、補充と修正ということも考慮に入れなくてはならない。しかしそれについての詳細な研究があるから、それによつて事件當時のゲーテのすがたを大過なく捕えることができよう。たとえば、

Goethes Sämtliche Werke (Jubiläumsausgabe). Bd. 28. Einleitung und Anmerkung von Alfred Dove.

A. G. Steer: Goethe's Social Philosophy.

(2) 「頸飾り事件」とはフランスのアンシャン・レジームの宮廷社會に起つた有名な醜聞スキャンダル。樞機卿ロアン (Rohan) は王と王妃の寵を失いかけたので再びそれを得ようとあせつて、ついに陰謀家カリヨストロ、ラモット (Lamoignon) 伯爵夫人の網にかかつてしまう。ロアンはラモット伯爵夫人の言葉を信じて、王妃が熱望しているという百六十萬リヴルのダイヤモンドの頸飾りを買つて、これを伯爵夫人に送つたが、途中でその頸飾りが紛失する。事件が発覺してロアンはバスチーユに送られ、伯爵夫人は投獄された。この事件はそれに無關係だつた王妃の面目を傷つけることはなはだしく、ひいては國民に宮廷社會の腐敗を痛感させる原因となつた。

(3) この詩はシャギニヤンによれば、もとは『人間』(Der Mensch) という題だつたという。もしそうならばこの場合一そう

よむわしくなる。(Marietta Schaginjan: Goethe, S. 35.)

(4) この譯語は、ソプーブル著小場瀬・渡邊譯『フランス革命』によつた。従來わが國では「テニスコートの誓い」といわれてゐる。同書(上)九二ページ。

(5) 「クリーオの巻」にある。このあと村長は革命の混亂と人々の難澁とをえがき出す。

(6) 一九五五年改譯の口語譯聖書による。この口語譯聖書は聖書の大衆化として大きな意味がある。

(7) この文はゲーテの植物學の論文の『つづき』(Verfolg 1817)として、『形態學』の一部に發表された。本文の題は『手寫本の運命』(Schicksal der Handschrift) といふ。(J. A. Bd. 39, S. 317.)

(8) トーベス・ペン『Phantastie über Goethe』より。この論文はその内容の深みと廣さにおいてゲーテ評論中の白眉であろう。佐藤晃一譯『永遠なるゲエテ』(講談社版)にある。

(9) これらの例はグーテ著柴田明德譯『ドイツとフランス革命』(三省堂版)によつた。

(10) トーマス・マンの前掲書。この貴族主義の問題は非常にむづかしいが、ゲーテという人間に深みと興行とを興えるものとして重要だと思ふ。この問題をトーマス・マンは『ゲーテとトルストイ』でも論じてゐる。

(11) この問題はさらに追究しなければならない。『マルクス主義の三つの源泉』となつたあの傾向と時代を共にし、かつその戦友であつたゲーテは、本質的にはまつたく地上的現世的である。ファウスト結末の美學的・カトリック的形式に迷わされるのは、反動的なロマン主義者か、自由主義的愚者だけである。(Georg Lukacs: Goethe und seine Zeit, S. 190.)

(12) この手紙の中で言われているファウストこそ、はじめてゲーテ著作集第七卷に公けにされた『ファウスト斷篇』(Faust. Fragment, 1790.)である。

(13) 前掲書(上)一八三、一八六ページ。

(14) このフェルステンブントに對してもゲーテは不賛成だつた。トーマス・マシによれば、「一七九四年、ガアゲルン男爵がドイツの知識階級、特にゲエテに對して、よいこと、即ち保守的な事がらのために、その實は新ドイツ諸侯同盟のためにペンを取らせ、ドイツを無政府状態から救おうとして招待狀を發した時、面白いことにゲエテは先ず自分に示された信頼に對して鄭重な禮を述べ、王侯と文士とが寄つて共同の仕事に携わることとは不可能と思ふ旨を答えた。」(高橋義孝譯「ゲエテとトルストイ」山本社版一五三ページより)

(15) 「兵士貿易」はブラウンシュヴァイク公の專賣ではない。シラーを苦しめたウエルテンベルク公カール・オイゲンもその點ではひけをとらない。彼がオランダ東インド會社に一名三百グルデンで賣つた三千名の赤子(せきし)は南アフリカに、一部はさらにジャヴァとセイロンに送られて、慣れぬ氣候のもとに、オランダ商人の利益のために戦い、あるいは傷つき、あるいはたおれたという。

(16) シラーは『たくらみと戀』の中で多くのドイツ諸侯に見られた非人道的な行爲を痛烈に暴露し批判した。

(17) このほかカール・アウグスト公に對するゲーテの信義と感謝は彼の作品に、手紙に、對話に、手記に、いたるところにあらわされている。七十九歳の時ゲーテはエッカーマンに今は亡き大公をしたので言つた。「大公がはじめのうちいろいろ困らせたり心配をかけたたりしたことを私は否定はしない。しかし大公の有爲な性質はまもなく澄んできて、りつばなものになつた。だから大公と共に生活し、大公と共に働くのが私のよろこびとなつた。」

(18) 前掲書『ゲエテとトルストイ』より。前の引用文はこの文につづく。

(19) そのよい例はトリール市郊外にある「イーゲルの記念塔」の記事である。ここでもゲーテの根本的な考えがさりげなく展開されている。その考えはこの古代ローマの遺跡に即して語られているが、本質においてはフランス革命をもふくめた大きな歴史の流れに關係してくる。その詳細な分析と研究は A. G. Steer: Goethe's Social Philosophy. にある。

- (20) ソノール著前掲書(下)一四一—一四三。
- (21) 事實、連合軍の落伍兵がまさに「盜賊團」に近い行動に出たことは『フランス出征記』に見られるところである。
- (22) 革命を取扱った作品は『大コフタ』一七九二年、『市民將軍』一七九三年、『激昂せる人々』一七九三年、『オーベルキル  
の少女』一七九三年、『ライネケ・フックス』一七九三年、『私生の娘』一八〇三年、『ヘルマンとドロテア』一七九七年等  
がある。このうち革命をまじりながら取扱つたものは斷篇のものもあり、完成されたものでも概して圖式的で文學作品として  
は生命の躍動に乏し。もつとも『私生の娘』の藝術的價值をメリッタ・ゲルハルトの論文の如きものもある。

参考文献

- Goethes Sämtliche Werke. 40 Bde. mit einem Registerband. (Jubilaums-Ausgabe.)
- Goethes Werke. 14 Bde. (Hamburger Ausgabe.)
- Goethe-Handbuch. 3 Bde. 1916—1918.
- Goethe-Handbuch. 4 Bde. 1955—
- Gerhardt, Melitta: Goethes Erlebnis der französischen Revolution im Spiegel der Natürlichen Tochter, Deutsche Vierteljahrschrift, 1923.
- Schagingjan, Marietta: Goethe, Berlin 1954.
- Viétor, Karl: Goethe The Poet, (Harvard University Press, 1949.)
- Kannitzer, Heinz: Über Literatur und Geschichte, Schwerin 1954.
- Bredel, Willi: Sieben Dichter, Schwerin 1952.
- Sheer, Alfred G.: Goethe's Social Philosophy. (The University of North Carolina Press. 1955.)



Mehring, Franz: Die Lessing-Legende. Berlin 1946.

Lucacs, Georg: Goethe und seine Zeit. Bern 1947.

アルベール・ソプール著小場瀬・渡邊譯「フランス革命」上下。(岩波新書)。

本田喜代治著「フランス革命」小石川書房。

トーマス・マン著佐藤晃一譯「永遠なるゲエテ」講談社。

トーマス・マン著高橋義孝譯「ゲエテとトルストイ」山本社。

後記 家庭の事情から時日の不足による論旨の不徹底については他日の研究と補正とを期したい。なお本稿は昭和三十一年度文部省科学研究費(各個研究)による研究の一部である。(一九五六・七・一七)

道記 前掲シャギニヤンの著書を貸與せられた北通文氏、ならびに脱稿後ではあつたが重要な文献の Mommser, Wilhelm: Die politischen Anschauungen Goethes, Stuttgart 1948.

を貸與せられた岡義達氏の両氏にここで感謝の意を表したい。

なお参考文献に次の書を追加する。

Meinecke, Friedrich: Goethe und Geschichte, (Sonderdruck aus „Die Entstehung des Historismus“) München 1949. これらによつて本研究はさらに刺戟され補正されることを私は期待している。(八月十二日「校正の日」記す。)